

「海釣り」に学ぶシミュレーション力と戦略の大切さ

特定非営利活動法人 とうほくPPP・PFI協会専務理事

川村 巖



中国の古いことわざに「一時間、幸せになりたかったら酒を飲みなさい」、「三日間、幸せになりたかったら結婚しなさい」、「八日間、幸せになりたかったら豚を殺して食べなさい」、「永遠に、幸せになりたかったら釣りを覚えなさい」があり、ヨーロッパには「一晩楽しみたいなら酒がある」、「一生楽しみたいなら釣りを覚えよ」という格言があると聞いている。左様に釣りの奥深い楽しみを実感している昨今である。

日本は周囲を海に囲まれた環境にあり、しかも住んでいる仙台は、仙台湾・金華山沖周辺という世界三大漁場の恵まれた条件下にある。「海釣り」にはまり込み、休日のたびに海が恋しくなるという、ほぼ病気に近い魅力に取りつかれてしまった。

釣りの楽しみを覚えて十数年という浅い経験のなかで、日頃、話題に「釣り」の話を出すと、いかに世の中に「釣り」の趣味を持っているファンの多いことかに驚かされることがたびたび。「話が尽きないのも釣りという世界の特徴」といえよう。

「海釣り」は三度と言わず、数知れない楽しみがある。まず、「釣り」の事前の準備での対象魚のターゲットに対する仕掛けや攻略法のシミュレーションだ。「海釣り」は対象魚の種類が格段に多い釣りで、生態の違いを把握するとともに、餌釣り、ルアなど釣法によってもタックルと仕掛けが違ってくる。バリエーションが多いことから情報収集を行い、シミュレーション力を養わないと釣果が期待できないことになる。次に勿論、実釣の楽しみがある。それから、帰ってきてからの料理の楽しみがある。

釣りをゲームとして捉える人もいるが、自分は生きている魚の命を絶つことから、感謝の気持ちを持って釣った魚は全て自分で捌き、きれいに調理してから自家用にするか知り合いなどに分けて差し上げることを大切にしている。

狙った魚がシミュレーションどおりにいくことはほとんど無い。海はそうたやすく釣りを人を喜ばせてはくれない。海の魚は砂地や岩礁帯、かけあがりなど棲家が異なることから仕掛けや道具立て、釣り場や釣り方も違い、水温や潮流と魚とのかかわりも知らなければ歯がたたないこととなる。「釣り」を覚えることは、それらすべての理解を深めること、自分の腕で海と存分に渡りあうことで、奥深さは並大抵ではない。

実社会における課題に対するアプローチも「海釣り」と似たところがある。様々な条件下におけるテーマに対し、的確な情報収集を行い、シミュレーション力を養って戦略を立てアクションを起こす。しかしながら、成果をなかなか得られないことが多い。大切なのはあきらめずに学びながら攻略していくことで、陽の目を見ることとなると信じている。